

豊干

シテ 豊干禅師

ツレ 寒山

ツレ 拾得

ワキ 寒山寺の僧

所 支那

時 冬

ワキ詞

「これは唐土寒山寺より出でたる僧にて候。我未だ天台の国清寺を見ず候程に。唯今思ひ立ち国清寺へと急ぎ候。

道行

「月は落ち寒鴉枯木におとづれて。く。冷じかりし楓橋を夜深くたどり行く末の。江村の漁火もほのかにて客船に至り山を越え。朝なくの数積る。夕の空は物凄や。く。

シテサシ

「面白や花あつて客を迎ふるに似たり。

ツレ

「鳥啼いて人を呼ぶが如し。

二人

「実に石上に詩を題して。緑苔を払ふ時とかや。

地

「米汁を手携へて。く。花落の塵に交り。白河の波に裳を濡し。万民に面をさらすも恨ならず。法の為なれば身を捨つる。吹く風の寒き山とて入る月に。指をさしても留め難きはつながらぬ月日なりけりやく。

ワキ詞

「如何にこれなる人々に尋ね申すべき事の候。

シテ「此方の事にて候か。何事にて候ぞ。

ワキ「天台の国清寺とは此所を申し候か。

シテ「さん候。これこそ天台の国清寺にて候へ。扱御僧はいづくより来り給ひて候ぞ。

ワキ「これは寒山寺より出でたる僧にて候。

シテ「何と御僧は寒山寺より御出でと候や。それにつき思ひ出したる事の候。古此所に寒山拾得と申せし人の。住み給ひたる所なり。

ワキ「実にくこれは貧士風狂の士として。

シテ「常の徒にこれをおすべきにあらず。

地「布儒又零落し。く。面貌孤衰して膚ぎやう骨と衰へ。或時は樺皮を冠とし。又或時は大なる木履をはきて風狂の。姿と見れど心は仏意に帰する人とかやく。

ワキ詞「如何に申し上げ候。豊干禅師の旧院はいづくの程にて候ぞ。

シテ詞

「豊干禅師の旧院は経蔵の後なり。今は寂として人なし。さりながら此方へ御入り候へ教へ申さう。これこそ豊干禅師の旧院にて候へ。」

ワキ

「とてもものに豊干禅師の謂委しく御物語り候へ。」

クリ地

「扱も豊干禅師と申すは。天台の国清寺に帰す。髪を切つて肩に等し。布裘又像を見す。」

サシシテ

「人あつて借問すれば。随時の二字を答へて他の語なし。」

地

「楽しんで独穀を碓舂き。則ち菜炊にこれをそふ。」

シテ

「曾て虎に乗じて松門に入れば。」

地

「各衆僧を。恐懼する。」

クセ

「或時豊干あまねく。山行せしに不思議やな。児の泣く声を聞きしかば。立ち寄りて委しく端倪を問ふに舍なうして。孤来と答へ申せば。誠に哀を催し拾ひ得たりと心得。拾得と彼を名づけつゝ。豊干様々養育す。」

シテ「かゝりける所に。

地「いづこより来りけん。拾得の如くなる寒山といへる童子来り。常に遊樂のたはむれの。浅からざりし有様は。喝呵大笑して言語も更に常ならず。

シテ詞「其時呂丘といつし人豊干に伺ひ。国清に今顕学の輩ありもやと問ひ給へば。寒山は文珠なり。拾得は普賢なりと答ふ。

地「呂丘此時驚きさわぎ。須臾に堂に入つてこれを礼す。

クセ「寒山拾得は。何故に今更我をば礼し給ふぞと。問ふに呂丘は豊干の教かくぞと語れば。

シテ「二人此時驚きて。

地「入禅の豊干こそ則ち弥陀の化現よと。云ひ捨て閑巖幽崛の内に入りにつけり。誠は我は古の寒山拾得よ疑ふなと。いふかと思れば閑巖石根は雲と立ちのぼり。縫目の中に入りにつけりく。

ワキ「苔の庭に法をのべ。く。ありつる告をまたんとて。袖を片しき臥しにけりく。

後シテ「一声の山鳥曙雲の外。虎降供して松門に入る。如何に沙門。汝貴き故により。忽ち夢中に豊干向顔をなす。同じく寒山拾得。世上の信たる事を知らせんが為。石の縫目をとく法の。仏体を顕し。給ふべし。

ツレ二人「石に精あり水に音あり。

シテ「虎うそふけば。風は大虚に渡る。

地「像せんせつたる石崛二つに割るれば普賢文珠顕れ給ふぞ有り難き。

ワキ「不思議やな目のあたりなる御姿を。拝する事の貴さよと。掌を合せて如我昔所願。今者已満足。

地「其時豊干は。虎上より。く。静におりて。菩薩に向ひ。迎姿を顕す上は。法恩微妙の舞樂をなさんと琴瑟鐘鼓。琵琶箏和琴。笙篳篥。虚空に

舞樂を奏しけり。

地

「舞樂も今は時過ぎて。

く。

有明がたの尽きぬ名

残。白むは東の山葛。かゝる奇特は此寺の。仏法

王法伽藍長久五穀成就の其誓願を夢中に見せて。

普賢文珠は。二巖に上り。豊干は忽ち弥陀と現じ。

西方遥の雲に乗り。飛行自在を顕し給へば菩薩も

獅子象にのりの姿。如来も金色の光を放つて。紫

雲の内にぞ入りにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂 著
『四流対照 謡曲二百番 下巻』芳賀矢一 訂